

【書評】

河合俊雄著『村上春樹で出会うところ』

ダルミ・カタリン
(広島大学 (助教))

2025年2月に朝日新聞出版から出版された『村上春樹で出会うところ』(副題: Encountering the soul in Haruki Murakami's short stories)は、同年6月に刊行された『謎とき村上春樹:「夢分析」から見える物語の世界』(新潮社)と共に、心理学者河合俊雄氏の最新の村上春樹論である。後者は著者の2011年の著書『村上春樹の「物語」——夢テクニストとして読み解く』(新潮社)の増補版であり、『1Q84』のほか、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』『騎士団長殺し』及び『街とその不確かな壁』などの長編小説を夢テクニストとして捉え、深層心理学の観点から分析するものである。それに対して『村上春樹で出会うところ』は、短編集『一人称単数』(文芸春秋、2020)の個々の作品を中心に、「出会い」というモチーフに着目して論じると同時に、ポストモダン社会における出会いそのものの本質を、ユング心理学の観点から解説することを目的としている。

本書における「出会い」は、現実的な出会いだけでなく、心理療法における「現実とは全く異なる次元での出会い」(p.v.)まで含む重層的な観点から論じられている。とりわけ強調されているのは、出会いを果たす二人の間に共有される「第三項」の役割である。河合氏によれば、村上作品における多くの出会いは、「何ものかを媒介することではじめて可能になることが多く」(p.14)、しかもそれは、『一人称単数』の以前の作品から村上春樹作品の一貫した特徴だという。『一人称単数』の分析に先立ち、プロローグでは1985年の「パン屋再襲撃」が、第1章では2005年の「偶然の旅人」が取り上げられ、村上春樹作品における出会いのあり方の変化が提示されている。以下では、各章の内容を簡単にまとめたい。

プロローグ「デタッチメントと出会い 「パン屋再襲撃」」は、村上春樹のデタッチメント期とされる初期作品群における出会いの本質を、「パン屋再襲撃」を通して検討するものである。河合氏はこの作品を夫婦関係の物語として読み、「結婚という一度目の出会いがあっても、まだ本当の出会いやつながりができていない」(p.8)という新婚状態における出会いの難しさを、語り手を襲う「特殊な飢餓」およびそれを象徴する夢の解釈を通して論じる。

現代人は超越的な世界とのつながりを失い、その結果として自分のこころの深みともつながれなくなっているという、ユングの「大きな連関の喪失」を踏まえ、河合氏は、語り手の飢餓と海底火山の夢を、垂直的な次元とつながろうとする欲望の象徴として捉える。とりわけ興味深いのは、作品を妻の物語としても読む点である。語り手は妻にかつてのパン屋襲撃の体験を語り、その呪いを克服するために、二人でマクドナルド襲撃に踏み込む。これによって本当の出会いが生じる可能性が示されるが、結果として解放感が訪れるのは妻のほうであり、直接性を避けるマクドナルド店員のマニュアル的対応によって語り手には不全感が残る。こうした分析を踏まえ、河合氏は本作品に

において本当の意味での出会いは成立しないと述べている。

第1章「偶然の出会い ～ 出会いの偶然 「偶然の旅人」」では、「因果的な関係で説明のつかないような偶然の符合」と説明される、ユングの「共時性 (synchronicity)」(p.31) の概念を踏まえ、出会いが実現する過程が論じられている。

本章でまず印象的なのは、河合氏が、主人公である調律師が毎週同じ時間に同じ場所へ出かける行為を、セラピストがクライアントを迎えるために非日常の時空間を用意する行為と同質の出会いの準備として捉え、こうした非日常性が反復されるなかで出会いが深まると指摘している点である。本作品では、調律師と女性のあいだでチャールズ・ディッケンズの『荒涼館』という第三項が共有されることで出会いが成立するが、調律師が同性愛者であるため、関係は深まらない。河合氏はここで「結婚の四位一体性」という概念を援用し、出会いのベクターが女性から調律師の姉へ移っていく過程を丁寧に分析している。さらに河合氏は、作中で出会いが成立することに村上春樹のコミットメントへの変化との呼応を見出し、本作品を無限の出会いの可能性を示すと同時に、「どの出会いにコミットし、どこを切るかの大切さをも語っている」(p.54) 作品として位置づけている。

第2章「ポストモダンの出会い 「石のまくらに」」では、相手が置き換え可能であるという「ポストモダンの出会い」のあり方が論じられている。「石のまくらに」の語り手である大学生は、バイト先の女性と肉体関係を結んだのち別れるが、以前の「出会い損ね」を描く作品群と決定的に異なるのは、分かれた二人の間に、彼女が書いた短歌という「第三のもの」が共有される点だと河合氏は主張している。ここでいう「第三のもの」は、心理療法においてクライアントとセラピストの間に共有される、クライアントの内面が表現されたイメージに相当し、河合氏によれば、短歌は「垂直的な世界を開き、その垂直的な深まりを通じて二人を結びつける」(p.69) のだという。

事後的な出会いを描いた「石のまくらに」に対し、第3章「別の出会いから本質としての謎 「クリーム」」では、出会い損ねから生まれる、より深い次元での別の出会いの形が論じられている。河合氏は、ピアノのコンサートに招待してくれた女性と出会い損ねた語り手が、その後老人と出会い、二人の間で「謎」が共有されることによって本当の出会いが成立すると分析している。また、老人が語り手に投げかける謎を人生そのものとして捉え、その謎が老人から語り手へ、さらに年下の友人や読者へと共有されていく構造について、「円と同じように外周を持たず、閉じずに広がっていく」(p.96) と指摘している。

第4章「別の出会いと癒し 「ウィズ・ザ・ビートルズ With the Beatles」」では、思春期における出会いと、それによる癒しの過程が論じられている。河合氏は、語り手がビートルズのジャケットを抱えた少女と遭遇する劇的な出会いに注目し、それを思春期における「絶対的なものの現れと出会い」と同質のものとして、「全存在を揺さぶるもの」(p.101) だと述べている。二人の出会いは一瞬の出来事にすぎないが、ビートルズのレコードの介在によって本当の出会いが成立する。他方で、語り手の最初のガールフレンドとの関係は、それとは対照的に、本当の意味で出会いのない関係として描かれている。ところが、語り手とガールフレンドの兄のあいだには、芥川龍之介の「歯車」という芸術作品が共有されることで本当の出会いが生じ、それが兄の癒しにつながる。河合氏によれば、これは心理療法におけるイメージの共有による治療と同様のものであり、心理療法における癒しがしばしば犠牲を伴うのと同様に、本作品においてもガールフレンドの自殺という出来事が語られているという。

第5章「出会いとフィクション 「チャーリー・パーカー・プレイズ・ボサノヴァ」では、フィクションにおける出会い、さらには死者との出会いが、語り手の夢を中心に論じられている。河合氏が、現実とフィクションの交錯に着目し、本作品が複式夢幻能と同様の構造を持つと指摘している点は興味深い。すなわち、語り手が亡くなったバード（チャーリー・パーカー）にボサノヴァを演奏してもらった夢は、語り手に音楽との出会いをもたらすと同時に、「無念の思いを抱いて亡くなった死者としてのバードの魂の救済」（p.136）でもあり、それは複式夢幻能における死者の成仏に似た展開であるという。また、語り手がでっち上げたレコードと現実に出会うという展開は、複式夢幻能における「現実の人物と歴史上の人物が交錯するシーンに対応する」（p.137）ものとして捉えている。なお河合氏は、夢から目覚めた語り手がバードの音楽を再現できないことで出会いの直接性が失われる一方、それでもなお出会いを書き留め、他者へ伝えることこそが「作家の使命」（p.139）であると結論づけている。

第6章「出会いの影 「謝肉祭（Carnaval）」では、美醜と醜さの主題を手がかりに、出会いの否定的側面が論じられている。河合氏は、語り手が出会う女性（F*）を特徴づける醜さを、彼女の全体を表すメトニミーとして捉え、語り手と彼女の間に共有されるシューマンの『謝肉祭』が、価値転倒という作品の主題を象徴していると読む。氏の分析において特に興味深いのは、語り手と妻、F*とその夫という四者関係を、「結婚の四位一体性」の図式を用いて解釈している点である。F*は語り手の無意識の女性像（アニマ）を体現しており、語り手が彼女と深くつながる一方で、F*の影の面（詐欺師的側面）を先に知った妻は、F*の夫と無意識的につながっている可能性があるという。更に作品後半に描かれる出会い損ねの物語についても同様の図式が適用され、「出会いや関係は、出会えなさやつながらなさによって補完される例として解釈されている」（p.160）。

第7章「出会いと自分の影 「一人称単数」では、前章と同様に、出会いの否定的な側面が論じられている。河合氏は、語り手が目的もなくスーツを着ることを自己欺瞞として捉え、本作品を「知らない自分との出会い」（p.175）の物語として解釈している。また、語り手を空っぽの一人称単数の象徴とみなし、本作品における一人称単数を、「外への顔も、それに覆われた内面も持たない、いわばポストモダンの意識に特徴的な、浮遊するもの」（pp.164-165）であると指摘する。さらに、バーで出会った女性が語る、語り手の記憶にない過去の謎めいた出来事は、こうした「ポストモダンの一人称単数の影の面を厳しく指摘する出会い」（p.179）だと述べている。

さて、本書の長所としてまず挙げたいのは、全体として非常に読みやすい点である。概念の説明が丁寧で、各章に適度なまとめが配されているため、ユング心理学に不慣れた読者にとっても理解しやすいかたちで議論が展開されている。また、本書は『一人称単数』に議論の中心を置きながらも、その作品論にとどまらない点も評価できる。プロローグで「パン屋再襲撃」を、第1章で「偶然の旅人」を取り上げ、さらにそのほかの複数の村上春樹作品にも言及することで、村上文学の全体像が「出会い」という観点から浮かび上がってくる点は、本書の大きな魅力である。

他方で、方法論に関する説明の妥当性については、多少疑問が残る。河合氏は「はじめに」において、本書の立場として、作品を「内から見ていく」、すなわち「物語のなかから意味をつかんでいく」（p.v）ことを掲げ、「外からの説明をしていくのではない」（p.vi）姿勢を強調している。確かに、河合氏は作品を作者の実体験と結びつけて解釈することを避けているが、「あるユング心理学の概念を当てはめたりするのではない」（p.vi）と断りつつ、分析の土台はユング心理学であり、随

所で「結婚の四位一体性」などの概念が援用されている。心理療法に馴染みのない筆者にとっては、こうした視点はなお作品の外部に位置するもののように感じられた。先行研究の参照を最小限にとどめ、難解な文学理論や作家論を前面に出さずに議論を組み立てることは、本書の読みやすさを支える重要な要因である。一方で、作品を完全に内部からのみ読み解くことが果たして可能なのか、という点については、検討の余地があるように思われた。

加えて、短編集『一人称単数』のうち本書で扱われていない二作品（「ヤクルト・スワローズ詩集」及び「品川猿の告白」）についても、同じ観点からどのような解釈が可能なのか、関心が残る。エッセイに近い「ヤクルト・スワローズ詩集」が分析の対象から外されたのは、先に述べた内部からの視点を維持するためであると推測されるが、機会があれば、猿との出会いを綴った文章から始まり、美しい女性編集者との出会い損ねを描いた「品川猿の告白」についても、河合氏による考察が提示されることを期待したい。

本書は、村上春樹作品を手がかりにしながら、私たち読者自身の人生におけるさまざまな出会い、あるいは出会い損ねについて深く考えさせる一冊である。『一人称単数』の丁寧な読解を軸に、他の村上作品にも触れつつ議論を広げる本書は、村上春樹文学における謎を考えるうえで、重要な参考書となることは間違いないだろう。村上春樹の文学に興味を持つ読者にはもちろん、心理学や精神分析に関心がある人にも、ぜひ手に取ってほしい一冊である。